

十勝川中流部河道掘削における地域連携について

帯広開発建設部 帯広河川事務所 計画課 ○大串 正紀
小原 義博
松井 博幸

十勝川の中流部は、帯広市をはじめ人口・資産が集中する地域に位置するとともに、急勾配で流下する支川が相次いで合流しているほか、流下断面不足のため、十勝川水系河川整備計画では、河道掘削が必要な区間となっている。一方、高水敷の公園等が多くの人々の憩いの場となっているほか、市街地近郊にありながら多様な河川環境が比較的多く、動植物の生息の場となっており、それが観光資源ともなっている。そのような背景のもと、地域との合意形成を図りながら治水・環境・利用等を踏まえた川づくりを進めるために「十勝川中流部川づくりワークショップ」を立ち上げて検討しており、その取り組み内容について報告するものである。

キーワード：防災、河道掘削、住民参加

1. はじめに

十勝川中流部は帯広市、音更町、幕別町の3市町にまたがり人口・資産が集中する地域に位置しており、十勝川水系河川整備計画において河道掘削が必要な区間(KP45.0~58.6)に位置づけられている。

相生中島地区(KP51.2~53.2)の河道掘削については平成21年度に着手し平成24年度より供用開始する予定であり、KP53.4~58.6とKP45.0~51.0については未着手の区間だが早急に整備が必要な区間となっている。

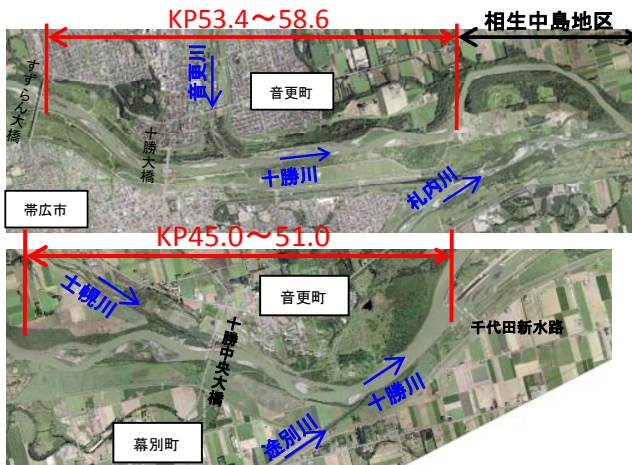


図-1 河川整備計画における河道掘削実施区間

一方で、市街地近郊にありながらヤナギ・ケショウヤナギを代表とする河畔林や生物の生息環境となる礫河原など多様な河川環境があるほか、サケの遡上、タンチ

ョウの越冬、ショウドウツバメの営巣なども見られる。また、十勝川中流部の河川空間は、高水敷に整備されている公園の利用者のみならず、川下りや野鳥観察、釣り、散策など様々なニーズを持った人たちが利用している。

以上のような背景から、治水安全度の確保と自然環境や利用に配慮した河道掘削等を実施するにあたり、地域との合意形成を図るため、有識者や地域住民等からなる十勝川中流部川づくりワークショップを立ち上げて、川づくりの方向性について検討することとした。

2. 十勝川中流部川づくりワークショップの取り組みについて

(1) 十勝川中流部川づくりワークショップの進め方の議論

十勝川中流部川づくりワークショップ（以下WSと言う）を設立するにあたり、WSの進め方等について地域に精通する者から意見を伺うため、事前に準備会を開催することとした。準備会のメンバーは、十勝の動植物（野生生物、水生生物、植生等）に関する専門家、景観等の専門家、十勝の観光に携わる者などから選定した。準備会では、十勝川中流部の治水や環境、利用等の現状について共通認識を持った上で、WSの進め方や大まかなスケジュール、メンバーの選定方法等について検討を行った。

a) WSの進め方の検討について

WSは、平成22年度中に概ね5回の開催により、川

づくりの基本的な方向性をとりまとめることでスケジュールを検討した。その概要は表-1 に示すとおりである。

第1回WSでは、今後の川づくりを考えるにあたり、十勝川中流部の現状について共通認識を持つため、川下りによる現地視察を行い、その後、十勝川中流部の現状と課題等を説明することとした。現地視察では、川の蛇行などの形状や河岸、砂州、河畔林等の状況に加えて、ショウドウツバメのコロニーなど豊かな環境を有する地点も視察ポイントとして抽出することとした。

第2回WSでは、様々な立場（地域住民、地域観光業、環境団体、専門家など）から、川づくりへの思いや意見等を発表してもらい議論することとした。

第3回WSでは、出された意見等を踏まえた上で川づくり案（事務局案）を提示し、その後、第4回、第5回WSの議論を経て、とりまとめることとした。また、計画段階のみの意見聴取にとどまらず、計画・調査・施工全ての段階で治水・環境・利用の面から意見をもらいながら河道整備を実施する「順応的管理」を念頭に置き、検討することとした。

そのほか、活発な議論ができるよう、参加者同士の意見把握や信頼関係向上につながりやすい少人数によるグループ討議を中心にWSを進めることとし、3つのグループが構成できる規模で参加者を選定することとした。

表-1 準備会で議論したWSの検討スケジュール

	開催時期	議論内容等
第1回	平成22年9月	WSの主旨説明、川下りによる現地視察
第2回	平成22年10月	地域住民、地域観光業、環境団体、専門家等による川づくりへの意見発表
第3回	平成22年11月	様々な意見を反映した場合の整備内容(事務局案)の提示と質疑応答
第4回	平成22年12月	事務局案への質問の回答と論点の整理、試行地の提案、今後の整備に向けての留意事項の検討
第5回	平成23年2月	川づくり案の最終イメージ提示と意見聴取、不確定事項の整理、試行地の選定

b) メンバーの選定について

地方自治体の担当者（北海道・帯広市・音更町・幕別町）はオブザーバーとして参加要請し、WSのメンバーは、準備会メンバーに加えて、十勝川水系河川整備計画策定時の流域委員会の委員、十勝川のリバーカウンセラー、地元町内会の代表者（自治体からの推薦により参加要請）を事前に選定し、その他のメンバーを公募（帯広開建 HP に公募記事の掲載及び報道機関へ投げ込み）することとした。

なお、公募対象は18歳以上で帯広市・音更町・幕別町に在住し、無償参加できる者とした。

公募の結果、十勝川で開催されているイベント関係者、環境系 NPO、地域住民、鳥類の研究者、自然ガイド、観光関係者、地元建設コンサルタント、地元建設業から参加者が集まった。表-2 に一般公募参加者の志望動機とその関心事項を示す。

表-2 WS参加者（一般公募）の志望動機と関心事項

志望動機	関心事項
流域に生息する生物と自然環境と人の関わりについて学習し、今後の十勝の財産づくりに関わりたい。	環境
河川改修と自然の調和に関心がある。	環境
自分を育ててくれた十勝川の環境変化を実感しており、河川改修に関心があるため。	環境
治水問題を知り、豊かな暮らしを考えてみたい。	治水
かつて礫河原で繁殖する鳥類の調査をしたことがある。その頃と比べると美しかった礫河原には樹木が繁茂しており、可能な限り礫河原を創出するような川づくりをしていきたい。	環境
川と防災、川と環境、川と歴史、川と地域生活などに関心がある。	治水
河川環境にもプラスになり、治水安全度向上につながる川づくりがあると思う。それを自ら提案できる機会なので非常にやりがいがある。	環境
魚を釣る立場から、河川事業に関わってみたい。	環境
より良い川づくりに参画したい。また、自分の抱く疑問点を解消し、スキルアップしたい。	河川利用
自分が所属する団体は、主に子供を対象に水辺活動を行っており、河川利用や治水などの今後のあり方に関心を持っている。	河川利用
どんなプロセスで環境に配慮した河川改修を行うのかに関心がある。	環境
環境に配慮した河道の掘削や護岸について関心がある。	環境
十勝川の河川事業と十勝川温泉の観光との両立に関心がある。	河川利用

(2) WSにおける議論の経緯

川下りによる現地視察を通してショウドウツバメのコロニーやカワセミ、中州や河岸付近のヤナギなどの密生状況、礫河原の減少状況等を確認した。また、現地視察の結果や十勝川中流部における現状と課題を踏まえた上で川づくりについては以下の意見が出された。

- ①河原、草原、河畔林など多様な環境が失われつつあるように思う。適度な攪乱、自然の水の力を利用することも必要ではないか。
- ②単調な川ではなく、中州や鳥類が繁殖できる崖などがあることでより魅力的な十勝川となり、観光資源にもなる。
- ③河畔林の功と罪を踏まえて、バランスを考えた川づくり案を作成する必要がある。
- ④川に接して住んでいる住民にとって、洪水は深刻な問題である。
- ⑤ワンドや湿地、瀬、淵などが必要だが、それらを維持していくのはなかなか難しいので、川の性質を良く理解した上で造成する必要がある。

様々な意見が出されたことから、川づくりの検討を進めるにあたり、「川に求める機能」と「中流部において実現可能な要素」を整理し議論を進めた。その結果、治水安全度を確保した上で、多様な生物が生息できる川づくりを求める意見が多く、礫河原や湿地環境の再生など変化に富んだ多様な河川環境を目指した川づくり案を作成することとなった。

検討を進めていく中で、礫河原や造成した湿地環境が維持できるのかとの意見が出されたが、川は自然の営みによって変化するものであるとの共通認識を持ち、極

力手をかけず自然に任せることで検討が進められた。また、維持管理面では河畔林伐採後の再樹林化が話題となり、植生の回復を促し草原環境とすることや、湿地環境とすることなどにより工夫することとした。

(3) WSを進めるにあたっての工夫

WSを進めるにあたり、以下の点について特に工夫した。

- ①河畔林の伐採と保全が論点になった箇所や、再樹林化防止のための湿地環境の創出箇所等、様々な意見がでた箇所については、極力WSメンバー全員で現地視察を実施し共通認識を持つことで、議論が収束しやすくなった。
- ②試行地を提案し、施工後の河床や河川水位等の状態を見てもらうようにしたことによりWS参加者が川づくりを考える上でイメージしやすくなった。また、平成23年9月出水後の河道状況を現地視察し、川のダイナミズムへの共通認識を持つことができた。
- ③地域の団体や関係機関との調整が必要な事案については、事前に関係者から意見等を聴取し、その結果をWSにはかった上で議論を進めることにより、地域の実情をWS全体で共有した上で、議論をすることができた。

以上のような取り組みを実施した結果、平成22～23年度の2カ年にわたり、合計10回のWSを開催することとなった。表-3にWSの実施概要を示す。

表-3 WSの実施概要

開催年月日	議論内容等
第1回 22.10.2	WSの主旨説明、川下りによる現地視察
第2回 22.10.29	十勝川中流部の特徴・河道の変遷、各々の視点で川づくりへの意見発表
第3回 22.12.2	川に求める機能と実現可能性な要素の抽出について議論
第4回 22.12.17	議論された要素をWS対象区間の各箇所にてはめてグループ討論
第5回 23.2.4	様々な意見を反映した場合の整備内容（事務局案）の提示と質疑応答、試行地案の提示
第6回 23.3.4	川づくり案、試行地について全体討論 ・川づくり案について合意できる部分と論点の明確化 ・試行地の掘削決定
第7回 23.7.9	論点となっている箇所の現地視察、現地視察の感想と意見交換 ・キツネが出没する河畔林伐採についての議論 ・樹木の連続性を拡幅するための措置についての議論
第8回 23.10.23	現地視察（試行地、既存の閉鎖水域）、川づくりについて意見交換 ・キツネが出没する河畔林の伐採箇所決定 ・樹木の連続性の拡幅するための措置方法決定 ・十勝川温泉からの景観とサケ放流河川流入箇所について合意形成 ・既存の閉鎖水域の保全、湿地の創出区域についての議論
第9回 23.12.16	川づくりについての意見交換 ・既存の閉鎖水域の保全方法、湿地の創出方法についての形成 ・方向が定まった地区のコンテンツ精査
第10回 23.3予定	川づくりについての意見交換 ・各箇所のコンテンツの決定 ・今後の整備に向けて

3. 具体的な川づくり案（WSの検討結果）

WS検討箇所のうち、代表的な箇所として音更川合流点下流地区の検討結果を以下に紹介する。

当該箇所は、右岸側は帯広市街地に隣接し、高水敷には野球場やサッカー場などの運動公園が整備されてい

るほか、左岸側は音更町の住宅地と接しており、両岸とも高水敷の河岸側に河畔林が密生している地域である。

グループ討議の中では、図-2 に示すような以下の意見が出された。

- ①左岸側の河畔林はキツネの住み家となり、エキノコックス蔓延への不安やゴミの不法投棄があるので伐採して欲しい。
- ②左岸の環境に配慮して施工された護岸ブロックを現状維持してほしい。
- ③蛇行を発生させるために川幅を広げて川に自由度を持たせたい。
- ④中洲を保全して欲しい。
- ⑤右岸側を掘削し親水性を創出したい。
- ⑥左岸の河畔林を保全し右岸を掘削した方が良い。

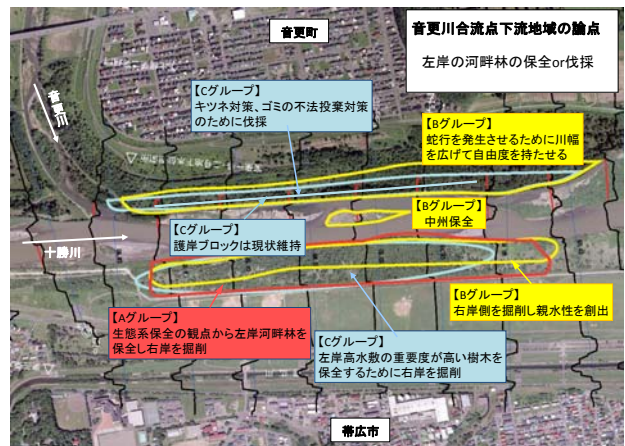


図-2 グループ討議による意見集約結果

当初、事務局としてはグループ討議の内容を考慮して図-3 に示すように、左岸側については住宅地に近い所は生活環境に配慮して密な樹木を間引きするがその他の樹林を残し、帯広市側の右岸を幅 50m 程度で掘削して流下断面を確保するという川づくり案を提示した。

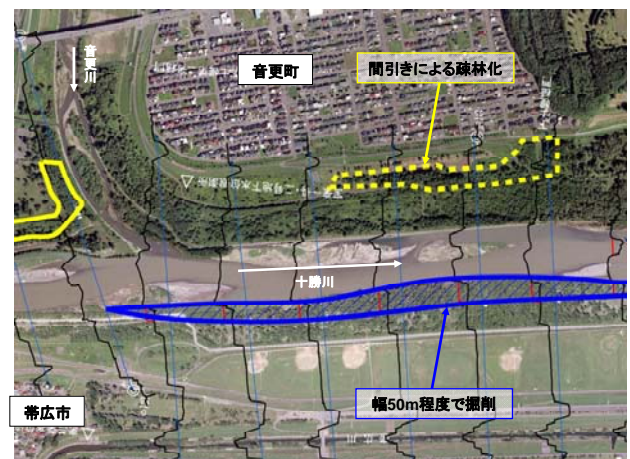


図-3 当初提示した川づくり事務局案（第5回WS時）

しかし、地域住民代表のWS参加者から、キツネの被害への対策は地先住民の強い要望であると説明があり、WS全体の意見として左岸側の河畔林について伐採する案と保全する案に分かれた。そこで、参加者全員で現地視察を実施して川づくり案の方向性を判断することとした。

現地視察では図-4 に示すように若齢のヤナギが密生した樹林、ドロヤナギが優占種の樹林、ケショウヤナギを含む大型樹林が確認された。

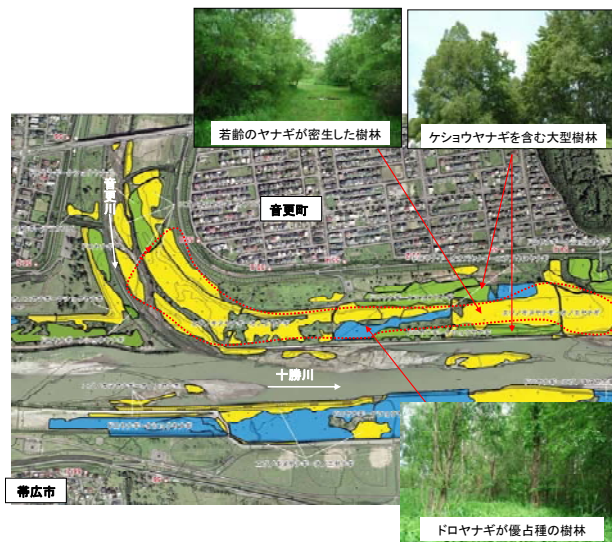


図-4 音更川合流点下流における現地視察結果

そこで、次のような点を踏まえて、川づくり案を再度検討することとした。

- ①若齢のヤナギが密生した樹林やドロヤナギが優占種の樹林は、十勝川の河川敷では一般的で広く分布しており、樹林の重要度はそれほど高くないこと。
- ②ケショウヤナギは北海道の十勝・日高地方と長野県の一部にのみ生育する樹種であり、これを含む大型樹林を伐採すると、回復には30～50年程度を要すること。
- ③密生した樹林を間引くとさらにキツネが住みやすくなること（キツネ対策には密林とするか全部伐採するのが望ましい）。
- ④鳥類の繁殖等を考えると、幅10m程度の樹林の連続性を確保することが望ましいこと。
- ⑤十勝川の河川敷では樹木が繁茂し、近年草原環境が減少傾向にあること。

その結果、図-5、図-6 に示すように、左岸についてはケショウヤナギを含む大型樹林と河岸側10m程度の樹林を保全し、残りの樹林は全て伐採して草原環境とし、右岸については河岸を30～40m程度の幅で掘削し流下能力を確保するという川づくり案を再度提案し、合意形成を図ることができた。

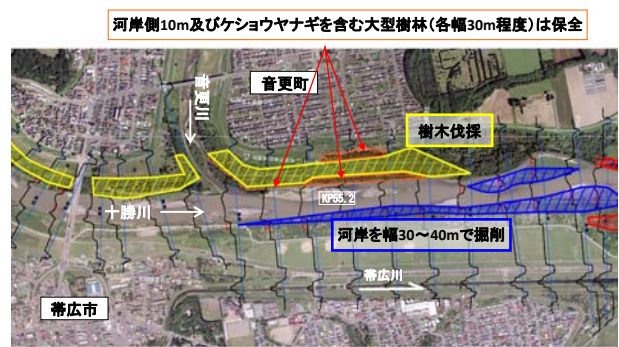


図-5 音更川合流点下流地区における川づくり案

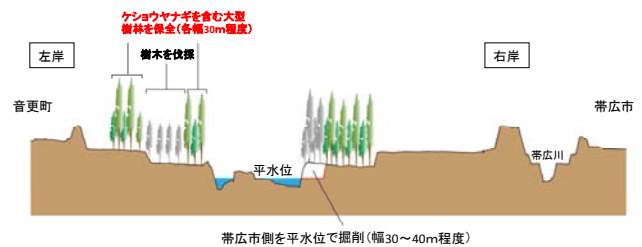


図-6 川づくり案の横断図（十勝川 KP55.2）

4. 今後の進め方について

本WSは、当該区間の川づくりの方向性を取りまとめるのが目的であり、10回の開催を経て今年度中に終える予定である。今後はまとめられた川づくり案をもとに、以下の点に留意して河道整備を実施する予定である。

- ①十勝の中心市街地や十勝有数の観光地である十勝川温泉・十勝エコロジーパークなどに近接した箇所で大規模な河道掘削や伐採等の工事が必要となるため、様々な調整が必要であること。
- ②WSは川づくりの方向性をまとめたものであり、具体の整備にあたっては、特に利活用の面などについて地域の声を反映させる必要があること
- ③河道整備には長期間を要し、整備途中段階においてWS開催時に想定していなかった事象が生じることも考えられること。
- ④実施中の整備内容がWSでまとめた川づくり案に沿ったものであるかを確認するためのフォローアップが必要であること。

以上のようなことから整備の進捗に併せて、地域住民等と意見交換していきたいと考えている。

本WSでは地域住民・環境団体・観光業等様々な観点で活発な討議が行われ、参加者の間では河道整備の考え方に関して一定の共通認識が生まれている。そこで、検討の場をWSから市民ボランティア主体の十勝川川づくり協働会議（仮称）のようなものに移行することを考えている。